

右京三条一坊九坪の調査

— 第428次

1 はじめに

本調査は個人住宅の新築にともなう事前調査として実施した。調査地は平城宮若犬養門の南西80mに位置し、1989年に実施した第202・11次調査（『1989平城概報』）の西側にあたる（図196）。

東西10m、南北8mの調査区を設定し、10月22日から11月13日まで調査をおこなった。

2 調査成果

現近代の耕作土（図199、1～6層）を除去したところ、地表下60cmで洪水砂（7層）を確認した。この層からは遺物の出土が見られなかったため時期比定は困難であるが、近代もしくは近世と推測される。なお、氾濫源は調査区の西方350mを流れる秋篠川と考えられる。この洪水砂を除去したところ、9層上面（近世～中世）で鍬の刃先痕跡を調査区全面で検出した。鍬の刃先は幅10～15cmであり、乱れている箇所もあるものの、おおむね東西方向に列をなしているようである。ほかには東西方向の溝を2条（SD2890・2891）検出したにとどまるため、当該期の土地利用形態を確定しがたいが、水田域として利用されていたのであろう。

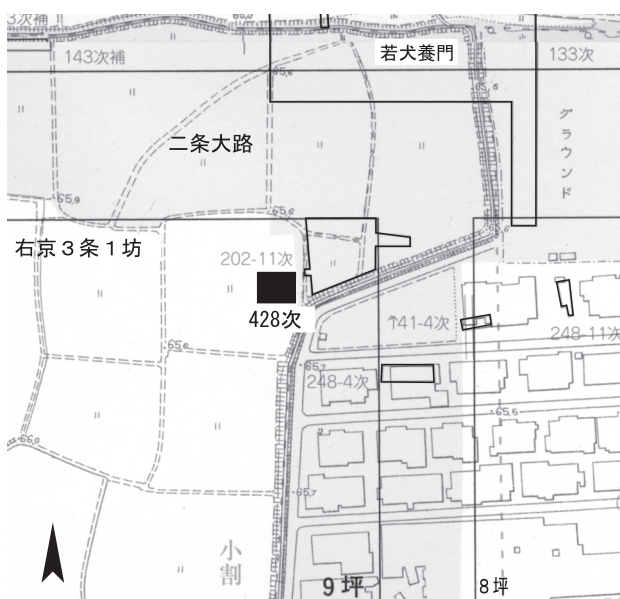


図196 第428次調査区位置図 1:2000

9～15層には土器、瓦、鉄滓が多く包含されている。とりわけ、鉄滓には注目される。個別の様相は後に詳述するが、鉄滓の出土は調査地周辺で鍛冶がおこなわれていたことを示唆していよう。ただし、鍛冶に関わる遺構は何ら確認できなかった。なお、これらの層には瓦器が含まれていることから、中世に比定できる。

16層上面においては調査区の東端で南北方向にのびる堤（SX2892）を検出した（図197）。堤より西側は水平ではなく若干西へ低くなっているものの、おおむね堤の高さは30cm程度である。断面観察によると、この堤は盛土によって形成されているのではなく、周辺を削り込むことによって堤の高まりがつくられていることがわかる。調査区の東側の様相が不明であるため断定できないが、この堤は水田畦畔と見なせよう。

3 出土遺物

土器類と瓦磚類をはじめとして、木製品や鉄製品が少量出土しているが、ここでは先述のとおり、多量に出土した鉄滓について記述しておきたい。

鉄滓はおもに9・10層から出土しており、総重量は4.5kgを超える（図198）。そのうちの多くが平面楕円形で丸底となる椀形鉄滓と考えられ、19点以上が確認できる。これらは大きさと重量から3つに分類できる。すなわち、ばらつきはあるものの、傾向としては大型品が長軸9cm・厚さ4cm・重さ300g、中型品は長軸8cm・重さ200g、小型品は長軸6cm・重さ100gをはかる。ほぼ完形のものでは、大型品が7点、中型品が4点、小型品が2点認められる。

4 おわりに

今回の調査では、中世から近世にかけての土地利用の一端を明らかにすることができた。水田として利用していた時期が長い中で、中世の段階には鍛冶がおこなわれていた可能性があるなど、土地利用の変遷が単純ではないことがうかがえる。

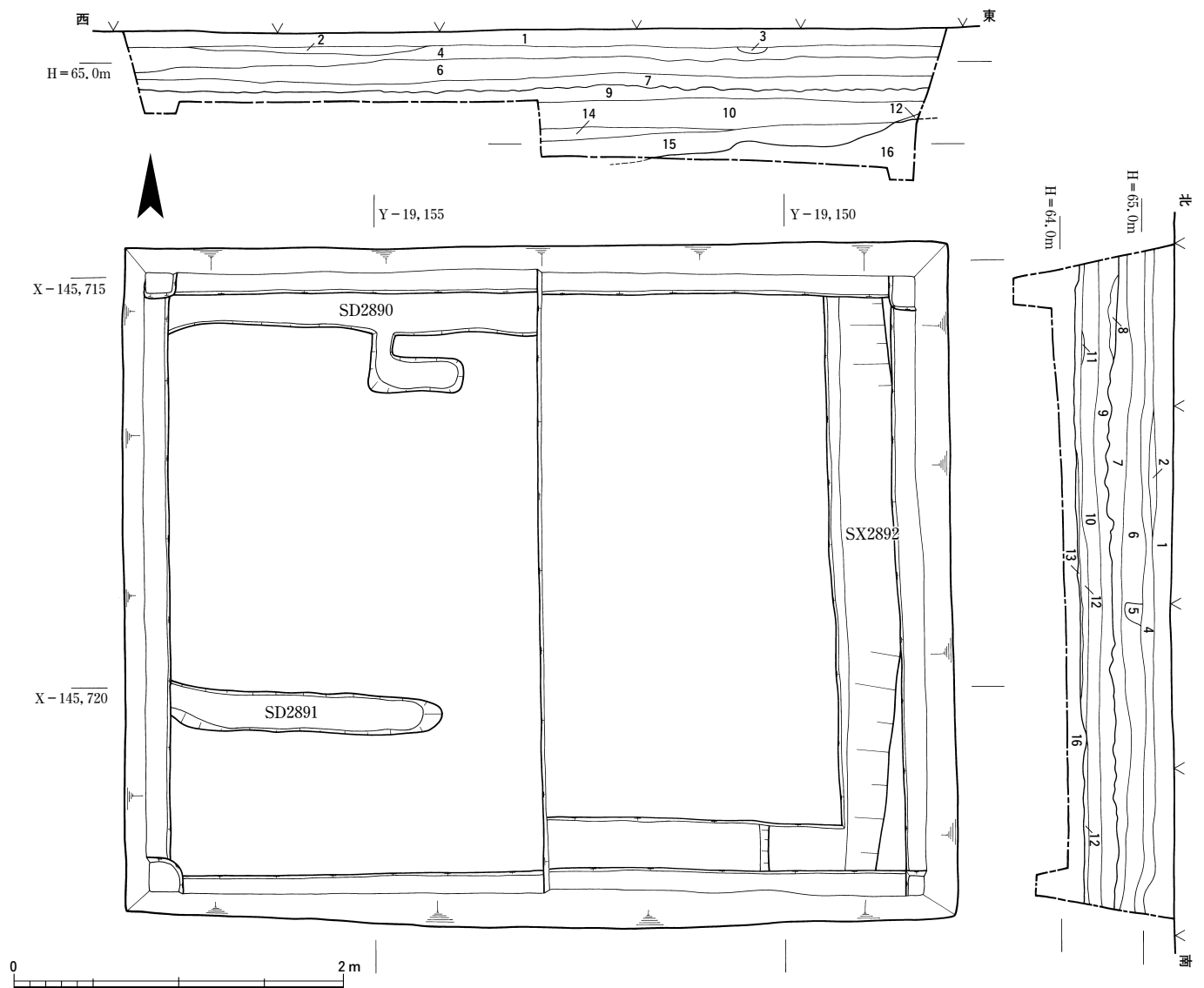
しかしながら、本調査区が位置する右京三条一坊九坪では調査事例も少なく、また本調査では奈良時代の遺構面を確認していない。したがって、この平城宮に南接する区域については不明な部分が多いといえる。この地域の様相解明は今後の課題である。（和田一之輔）



図197 SX2892 (北西から)



図198 梔形鉄滓 (手前：小型、左奥：中型、右奥：大型)



<土層註記>

1. 10BG3/1 暗青灰色粘質土 近現代耕作土
2. 10BG5/1 青灰色砂質土 近現代耕作土
3. 10BG6/1 青灰色砂質土 近現代遺構の埋土
4. 10BG7/1 明青灰色粘質土 近現代耕作土
5. 10BG5/1 青灰色粘質土 近現代遺構の埋土

6. 10YR7.6 明黄褐色砂質土 近代～近世耕作土
7. 10BG6/1 青灰色細粒砂～中粒砂 近代～近世洪水砂
8. 10BG7/1 明青灰色砂質土 SD2890の埋土
9. 5 BG6/1 青灰色粘質土 中世包含層
10. 5 BG6/1 青灰色粘質土 中世包含層

11. N6/ 灰色砂質土
12. 10BG6/1 青灰色砂質土
13. 5BG7/1 明青灰色粘質土
14. 7.5Y5/1 灰色粘質土 中世耕作土
15. 7.5Y4/1 灰色粘質土 中世耕作土
16. 5Y2/1 黒色粘質土

図199 第428次調査遺構平面図・断面図 1:80